様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ８ 月 １０ 日現在

機関番号：２３９０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３６００２８

研究課題名（和文）東・東南アジア地域におけるツバメの巣取引の多現場民族誌的研究

研究課題名（英文）Multi-sited Ethnography of Edible Bird's Nest Trade in East and Southeast Asia

研究代表者
市川　哲（ICHIKAWA, Tetsu）

名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・准教授

研究者番号：４０４３５５４０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は近年の東・東南アジア地域における、中華料理の高級食材であるツバメの巣の生産・流通・販売・消費の特徴を、明らかにした。その際に本研究が取った研究手法が、東・東南アジアの複数の地域における同商品の取引および複数の行為体の活動を対象とした他現場民族誌的調査である。特に本研究では東南アジアにおける、人工的な建築物の中に人為的にアナツバメに巣を作らせる手法である。

研究成果の概要（英文）：This research has investigated characteristic of recent trade of edible bird's nest trade in East and Southeast Asian countries. Edible bird's nest which is used as luxurious ingredient for Chinese cuisine is mainly collected in Southeast Asia and exported to East Asia, especially Hong Kong and China. To understand the nature of this trade, this research take multi-sited ethnography as research method and conducted field works in some areas in East and Southeast Asian countries. Recently traders in Southeast Asian countries have built farm houses in which swiftlets build their nests and taken the nests. They exports these nests to East Asian countries such as Hong Kong and China.

研究分野：地域研究

キーワード：ツバメの巣　東南アジア　マレーシア　中国　華人　先住民　多現場民族誌

１．研究開始当初の背景

中華料理の高級食材の一つである「ツバメの巣」は、10 世紀前後から現代にいたるまで、東南アジアやオセアニア各地で採集され、中国および世界各地のチャイナタウンにもたらされるという生産・流通・消費のネットワークを形成してきた。だが近年、このツバメの巣の生産と取引には多大な変化が生じている。それが、現地の人々が倉庫に似た建物を建築し、その中にアナツバメを呼び寄せ、人為的に巣を作らせて採集するという新たな手法の開発と、それに伴う生産・流通・消費の変化である。

中国文化圏で珍重される「ツバメの巣」とは、アマツバメ目アマツバメ科アナツバメ族の鳥類の唾液腺の分泌物によって作られた巣である。中国文化圏では古い時代からこの「ツバメの巣」を高級食材として珍重し、中華料理に使用してきた。ツバメの巣そのものは味がないが、ナマコやフカヒレ等の高級食材と同様、調理方法を工夫することにより得られる食感や、その希少性から中国文化圏では重要な食材であり続けた。

この「ツバメの巣」を算出する鳥類は主に熱帯アジアやオセアニアの石灰岩質の洞窟に営巣する性質を持つ。これらのアナツバメが営巣する洞窟は多島海の石灰岩質の島々の切り立った断崖にできた洞窟や、熱帯雨林の中の洞窟であることが多い。そのため「ツバメの巣」の採集には、このような地理的に接近が困難な洞窟に行き、洞窟内の岸壁に営巣された巣を採取するという困難を伴う。

だが中国系商人は、たとえば熱帯雨林内の洞窟の中のアナツバメの巣を採取するための生態学的知識や技術を持たなかった。そのため、巣の採集は、それらを実際に消費しない現地の先住民（主に狩猟採集民や漂海民）が行ってきた。このようにして採集された巣は近隣の焼畑耕作民や水田耕作民、華人系ミドルマン等が購入し、そこからさらに香港等の中国文化圏の商業都市に輸出されて集積され、そこからさらに中国大陸諸地域や台湾、世界各地のチャイナタウンに輸出されてきた。

このような、いわゆる東南アジアの熱帯雨林地域における河川上流域の民族集団が、外部世界で珍重される各種の森林産物を入手し、それをより河川下流域に居住する他の先住民や華人に代表される都市住民、マレー人に代表される沿岸部住民といった他の民族集団が入手し、最終的にそれらを世界市場に輸出する、さらに逆のルートを通じて資金や工業製品等が河川上流域に流れてゆくという現象は、当該地域の伝統的な交易パターンであった。本研究が取り扱うツバメの巣取引も、このような東南アジア、特に島嶼部熱帯雨林地域における伝統的な交易ネットワークに重なる形で執り行われてきた。いわばツバメの巣の取引とは、中国人商人が行うだけの商業活動ではなく、東南アジアやオセアニアの先住民や現地の中国系住民といった、複数の民族からなるエスノ・ネットワークに依拠する交易網を形成してきた。このような特定の産物の交易に注目することにより、ミクロなレベルの地域社会とマクロなレベルの世界市場との接合の様式を明らかにする研究は、80 年代以降隆盛した世界システム論や 90 年代以降のトランスナショナリズム論の展開と軌を一にしながら発展してきた研究分野であった。

このような研究はミクロなレベルのフィールドワークを重視する地域研究や文化人類学にとって、特定の商品や人々、社会関係等の流れを調査対象とすることにより、それらが横断する複数の地域を視野に入れた、より広い現象を理解する方途を示したといえる。そのため本研究でも以上の問題意識に基づき、東南アジアおよび東アジアにおけるツバメの巣取引という、特定の商品の流れをめぐる複数の地域や民族集団の相互関係およびそれらを取り巻くより大規模な社会背景を明らかにすることを試みた。

２．研究の目的

本研究は、以上のように古くから東南アジアやオセアニア各地で採集され、中国市場向けに輸出されてきたという、複数の民族集団や地域を横断するツバメの巣の取引の現代的な変化の特徴を、「エスノ・ネットワーク」、「生態学的知識」、および「商品連鎖網」のそれぞれの変容、という観点から分析する。

まず本研究は「エスノ・ネットワーク」というキーワードにより、単一の民族集団にのみ特化した調査手法や分析枠組みを取らず、複数の民族集団や地域集団、さらには特定の民族集団が国家や国境を越えて展開するトランスナショナルなネットワークや社会活動を視野に入れる調査研究を行うことを目指す。次に「生態学的知識」というキーワードにより、ツバメの巣の採集および生産という現象を、いかにしてアナツバメの営巣地に接近するか、アナツバメに営巣させるか、あるいは人為的にアナツバメを特定の営巣地に呼び寄せるか、という、様々な知識や技術の側面に注目する。そして「商品連鎖網」というキーワードにより、ツバメの巣という特定の商品が、生産者と消費者をいかにしてつないでいるのか、またそれが単線的に取引されるだけでなく、複数の民族集団や地域集団を横断する形で、どのようなネットワークを形成しているのか、ということを明らかにすることを試みた。

そのための調査手法として本研究は「多

現場民族誌的調査」（multi-sited ethnographic research）を採用し、生産地・経由地・消費地という異なる特徴を持つ複数の地域で、ツバメの巣取引に携わる多様な民族集団の関係性を対象としたフィールドワークを行った。多現場的民族誌とは 1990 年代後半以降、従来のミクロなレベルに特化した民族誌的フィールドワークの地理的な制限を乗り越えるために、グローバル化の進展とともに拡大する人や商品、ライフスタイル等のトランスナショナルな流れを視野に入れ、それらが関係する複数の地域での同時進行的なフィールドワークの実践、およびそれら複数の地域や民族集団間の相互関係を明らかにするための調査方法である。上述のように現在の東・東南アジア地域におけるツバメの巣取引の実態と現代的な特徴を理解するためには、多現場的民族誌が試みるような、特定の商品の流れとそれを取り巻く複数の地域・民族集団の諸活動に注目する必要がある。そのため本研究は、ツバメの巣取引の現代的変容とその特徴を、「民俗的な生態学的知識／技術」から「自然科学的な生態学的知識／技術」への移行、という分析枠組みに依拠することにより、現地調査に基づく多角的な視点から明らかにすることを試みた。

３．研究の方法

本研究が採用した調査手法は複数の地域での同時進行的なフィールドワークを実験する、「多現場民族誌的調査」（multi-sited ethnographic research）である。そして生産地・経由地・消費地という異なる特徴を持つ複数の地域で、ツバメの巣取引に携わる多様な民族集団の関係性を対象としたフィールドワークを行う。それにより、ツバメの巣取引の現代的変容とその特徴を、「民俗的な生態学的知識／技術」から「自然科学的な生態学的知識／技術」への移行、という分析枠組みに依拠することにより、現地調査に基づく多角的な視点から明らかにした。そして東アジア（日本を含む）および東南アジアにおけるツバメの巣の取引の動態について調査した。

また調査地では実際にツバメの巣を取引している人々や、かつて熱帯雨林の中の洞窟でツバメの巣の採集に携わった人々、近年になって人為的に建物を建築し、その中にツバメを呼び寄せて営巣させることを試みている人々、それらの活動のための諸機械を販売している人々や使用している人々、ツバメの巣の流通にかかわっている人々、

具体的な調査方法は、現場での参与観察とインタビュー調査からなる民族誌的フィールドワーク、ツバメの巣ビジネスを行っているビジネスパーソンへの聞き取り調査、商店での観察、ツバメの巣を人工的に営巣させている建物の訪問と関係者への聞き取り、現地でツバメの巣を消費している人々への聞き取り、現地の研究機関での論文や報告書、新聞記事の収集と分析である。さらにこれらの現地調査に加え、日本国内での関係する文献資料の収集と整理、類似した商取引や東南アジア島嶼部熱帯雨林地域の伝統的な交易関係に関する先行研究との比較、近年のグローバル化研究やトランスナショナリズム研究との比較研究等を行った。

具体的な調査地はマレーシアのサラワク州および首都クアラルンプールであり、これらの地域でのフィールドワークおよび比較検討のために日本のチャイナタウンでの調査も行った。

４．研究成果

前述のように東南アジア島嶼部熱帯雨林地域では古い時代から先住民が中心となって、石灰岩質の洞窟で岸壁にアナツバメが作った巣を採集し、それを華人系商人に売るということがなされてきた。だが 1990 年代以降、東南アジアでは従来のように海岸部の岩壁や熱帯雨林内の洞窟で営巣された巣を先住民が採集するのではなく、現地の中国系住民がアナツバメの生息地に倉庫に似た外見の建築物を建て、その内部を人為的に洞窟と同じような状態にすることにより、建物内部でアナツバメに営巣させ、巣を採集するという新たなメソッドが開発された。

またアナツバメが営巣・抱卵している際の鳴き声を録音した音源をスピーカーで流すことによりツバメを建物に呼び寄せたり、サーモスタットやスプリンクラーを使用し建物内の温度や湿度を一定に保つことで洞窟と同じ環境を準備したり、アナツバメの生息数が多いランドスケープを調査しそこに建物を建てたりといった、様々な試みがなされるようになった。この場合、アナツバメが多く生息する地域や、営巣しやすい生態学的条件が重視されることになる。いわば人工的な建築物にアナツバメを呼び寄せ内部に営巣させるために、先住民だけでなく中国系商人もアナツバメの生態に関する知識や生息地の自然環境に関する生態学的知識を追求するようになったのである。これは従来の、アナツバメの生息する地域の生態学的知識が必要とされるのは先住民だけであり、流通と消費にかかわる中国系住民にはそれらの知識や技術は必ずしも関係ないという状況を変化させるものである。そのため 2000 年代以降、マレーシアやタイ、ベトナムといった東南アジア各地の華人社会では「ツバメの巣ビジネス」がブームともいえる活況を呈するようになった。

このようなメソッドの導入により、東南アジア各地の中国系商人はツバメの巣を入手するために必ずしも熱帯雨林の洞窟で巣

を採集する先住民に頼る必要がなくなっただけでなく、持続的かつ大量にツバメの巣を供給することが可能になった。現在でも東南アジアやオセアニアの熱帯雨林や海岸部の洞窟での先住民によるツバメの巣の採集は存続しているが、中国系住民が所有する建築物で採集される巣の取引量は激増している。このような状態は、中国系住民が流通の「川上から川下まで」を独占できるようになったことを意味する。いわば、アナツバメに関する新たな生態学的知識とそれに基づく応用技術が、従来のエスノ・ネットワークに依拠した商品連鎖網を変化させているのである。「伝統的」な巣の取引が先住民による「民俗的な生態学的知識／技術」に依拠していたのだとすれば、近年は中国系商人が主体となる「自然科学的な生態学的知識／技術」が重視されている。

ただし、このようなメソッドは必ずしも簡単ではなく、例えば建物を建てたり必要な機材をそろえたりといった初期投資が最低でも日本円で 300 万円近く必要であり、誰でも行えるというわけではない。また現地での聞き取りでは、建物を建てても適切なランドスケープの選択を行わなかったり、アナツバメを集めるための適切な技術を使用しない場合には、巣を得ることができないため、場合によっては 8 割近いビジネスマンがこのビジネスに失敗しているとのことである。そのため、このビジネスはハイリスク・ハイリターンであり、このビジネスに関する書籍が出版されたり、ビジネスを始めるためにセミナーが開催されたりする。さらには大量のアナツバメを集めるため衛生面でも問題が生じ、都市部でこのビジネスを行うことは禁止されている。しかし、一獲千金を目指す人々によって、ツバメの巣ビジネスは過熱し続けている。

またこのビジネスに関するメソッドには個人的なものだけでなく、ツバメの巣取引にかかわってきた特定の家族が保有するメソッドもあり、また特定の家族（特に華人）のトランスナショナルなネットワークが重要な役割を持っていることもある。さらには中国大陸の消費動向や中華人民共和国政府とマレーシア政府との外交関係、中華人民共和国政府によるツバメの巣の輸入制限など、さまざまなレベルの要因により、ビジネスにも影響を与えている。

そのため本研究は、東南アジア（本研究ではマレーシア、タイ、ベトナムでの現地調査に基づく）から東アジアを経て世界各地のチャイナタウンへ、というツバメの巣の「商品連鎖網」の現代的な特徴を、複数の民族集団がアクターとなる「エスノ・ネットワーク」の変化という観点と、民俗的な知識／技術から自然科学的な知識／技術へ、という「生態学的知識」の変化という観点を導入することにより、フィールドワークに基づく視点から動態的に把握した。ツバメの巣に代表される中国市場向けの特産物の交易の研究に関しては、従来、歴史学や政治生態学、文化人類学の分野で行われてきた。だが本研究はそうした伝統的な交易ネットワークの現代的諸相の理解のために、「民族間関係の変化」と「自然環境利用の変化」という観点を導入した。それにより、特定の地域を越えた伝統的な交易関係の現代的な動態を明らかにするという点で、特定の地域のミクロな文脈に立脚しながらも、それを越えたネットワークというマクロな現象を把握するという研究手法の可能性を提示した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　6　件）

① 市川哲　2017　「商いの文化」宮原暁編著『東南アジア地域研究 2　社会』慶應義塾大学出版会、183-198 頁。

② ICHIKAWA Tetsu 2016 Building Houses and Graves for Their Ancestors in Their Hometowns: Papua New Guinean Chinese of Homecoming Practices in Their Ancestral Villages in China. *Studies in Humanities and Cultures* 27:193-201.

③ 市川哲　2015 年　「マレーシア、サラワク州の観光と手工芸品：土産物店を利用する先住民」『交流文化』（立教大学観光学部）第 15 号、16-21 頁。

④ 市川哲　2014 年　「マレーシア、サラワク州における手工芸品研究のための覚書：観光と民族関係の接合」『立教大学観光学部紀要』（立教大学観光学部）第 16 号、136－146 頁。

⑤ 市川哲　2014 年　「サラワクにおける『ツバメの巣』ビジネスの特徴：新たな技術の導入と持続可能な採集の試み」『熱帯バイオマス社会』（京都大学東南アジア研究所）第 20 号、9－16 頁。

⑥ 奥野克巳・市川哲　2014 年　「ベゾアール・ストーンの現在：ヤマアラシの胃石と先住民・ミドルマン・華人―」『熱帯バイオマス社会』（京都大学東南アジア研究所）第 18 号、1－10 頁。

〔学会発表〕（計　2　件）

① 市川哲　2014 年　「ニューギニア華人研究者の立場から：呉燕和のフィールドワーク再考」日本台湾学会第 16 回学術大会分科会「呉燕和『ふるさと・フィールド・列車－台

湾人類学者の半生記』を読む：人類学と歴史学の立場から」（代表：沼崎一郎・東北大学）於・東京大学（2014年5月24日）

② ICHIKAWA Tetsu 2014 ‘Chinese-indigenous relationship in Bornean rainforest: Diversification of Chinese communities in an upriver area of Sarawak, Malaysia.’ at International Union of Anthropological and Ethnological Sciences Inter-Congress 2014, Organized Panel “Population Movement and Diasporic Space: Anthropological Sudy on Chinese Overseas in East and Southeast Asian Countries” at Makuhari Messe, Chiba, Japan (18th of May, 2014)

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
市川　哲（ICHIKAWA Tetsu）
名古屋市立大学大学院・人間文化研究科・准教授
研究者番号：　40435540

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）